

「あなたのことが大好き！」「特別な人！」と言ってくれる国

私がエルサルバドルという国を知ったのは1994年、JICAの青年海外協力隊の面接試験を受けて「エルサルバドルかカンボジアだったら、どちらの国に行きたいか。」という面接官の問いからだった。地理の苦手な私は、カンボジアは何となく想像できたが、エルサルバドルという国は理解の外の国であった。その時口をついて出たのが「エルサルバドルに行きたい」という言葉だった。それから30年以上、私がおその国に住み続けるとは全く思わなかった。



新しい世界にチャレンジ！

1994年7月に日本を出発。好奇心が強い割には小心者だった私は、外国旅行をしてみたいと思ってはいたものの、それ以前に行ったのは大学の卒業旅行のアメリカ西海岸、ガッチガチのツアー旅行だけ。次の海外旅行が中米になるとは思いもよらなかった。1か月強のグアテマラ共和国の古都アンティグアでの語学訓練を経て同年8月末初めてエルサルバドルの土を踏んだ。空港は蒸し暑く、「この国でこれから2年間過ごすのだ。」とぼんやり考えていた。青年海外協力隊の2年間は、とにかく様々な経験をさせてもらった。

すべてのことがカルチャーショック。時間はラテン時間。日本のような5分前集合など全く考えられなかった。5分10分の遅れならまだしも1時間2時間というのも経験した。パーティーに呼ばれてもいつ始まるかわからないし、いつ終わるかもわからない。また、初めのうちはスペイン語もよくわからず、何を言われているかわからない。仕事は大体想像がつくので、それなりに対応をすることができたが、いざ街に買い物などに出てみると、街の人の言葉はちんぷんかんぷん。でも、なぜかみんな優しい。それがエルサルバドルの最大の魅力なのだと思う。

あっという間の2年が過ぎ、自分にもエルサルバドルの友人ができた。とにかくいつも「La quiero mucho. や Te quiero mucho. (あなたのことが好き!）」と大勢の人から思いっきりハグをされた。言葉が通じなくても、自分がここにいていいのだと言う安心感を与えてくれる。そして、「Tu



協力隊の活動の一つ。車いすバスケットボールのチームのメンバーと一緒に！

eres muy especial. (あなたは特別な人なのよ!)」とほめ倒してくれるのだ。

縁があって、エルサルバドルに住んでいた日本人と結婚することになり、そこで2人の子どもに恵まれた。私の子どもたちも同じように、たくさんのエルサルバドルの人々にハグをされ、「あなたが大好き!」「あなたは特別よ!」と言われて育てられてきた。日本で育てていたら、私はわが子たちに対し多分もっと怒っていただろうし、彼らはひどく人の目を気にするような子どもになっていたと思う。でも、ここエルサルバドルは全く違う。「自分が自分のままで良い!」、そんな暮らしができる国である。そうやって育てられた私の子どもたちは、自己肯定感が強くなっていた。日本人の母親に育てられたこともあり、変なところで引っ込み思案な面は出てくるものの、自分が愛されていると感じているということがよくわかる。そんな素敵な国に住み始めて、気がついたら30年を超えていた。振り返ると何度「あなたのことが大好き!」「あなたが特別よ!」と言われてきたのだろう。その魔法の言葉がどんどん心を暖かくしてくれる。



エルサルバドルで長年下宿したファミリー。今でも交流が続いている。



毎年恒例。家族一緒に初日の出。

事情があって、ここ2年ほど日本に住んでいて、子どもたちと関わる仕事に就くことができた。日本人はとっても謙虚であるが、その謙虚さゆえに、人前で「あなたが大好き!」「あなたは特別よ!」と言う言葉をあまり聞かない。そんな環境にふと寂しくなり、日本で出会った子どもたちに私からそうした言葉をかけるようにしている。すると子どもたちは屈託のない笑顔を見せてくれる。この笑顔は万国共通である。

エルサルバドルと言う不思議な国に住んだ人は、この人懐っこいエルサルバドルの人々に魅了されてしまう。私もその1人で、これからも何度もエルサルバドルに戻ると思う。

柴田 麻左子 (しばた まさこ) 氏

1994年7月から1996年7月までサンサルバドルで障がい者スポーツの指導に従事する。その後、同国で知り合った日本人と結婚し、現地で仕事をしながら子育てをする。2024年からは家族と離れ、日本で子どもたちの療育にかかわる仕事をしている。